

## トランスパーソナルを乗り越え〈うぶすな〉に「ワープ」

實川 幹朗 姫路獨協大学\*

“Warp” to Ubusuna (indigeneity) through Trans-Transpersonal

ZITUKAWA Mikirou

## 1 トランスパーソナルのこれまでと日本

トランスパーソナルの運動は、いま岐路に立たされている。学術大会の標題は明るくも聞こえるが、必ずしも体を表わさない。この数十年のあいだ、トランスパーソナルの提案に刺激され、心理学の研究範囲は「スピリチュアル」な領域や身体技法を含めた方面にも広がってきた。しかしながら、この運動そのものは拡大を止め、特徴もはっきりしなくなってきた。公開シンポジウムのシンポジストをはじめ、多くの参加者が共通してそう認めたのである。トランスパーソナルの実質的な創始者で、第一人者であったケン・ウィルバーその人が、すでにこの運動を去っている。

しかし、トランスパーソナルの行き詰まりをどう抜けるか、と考えるべきではあるまい。大切なのは心の研究の中身で、運動体の組織や名前ではない。むしろ今、私たちはよい折りに恵まれたのかも知れない。これまでのトランスパーソナルでは考え方そのものに、時代的、文化的な制約が強すぎるからである。

トランスパーソナルの名前そのものが、そろそろ「賞味期限」を過ぎるかもしれない。トランスパーソナル心理学/精神医学会の設立準備の時から、私はそう言い立ててきた。この(当

時)新しい名前は、新しいだけにすぐ古くなるうから、別の名前を用いる方がよいと考えたのである。

もちろん、名前を変えれば済むことでもない。この分野の課題を担いたいなら、私たちはもっと自らの慣らわしに誇りを持つべきに違いない。このたびはたまたま、トランスパーソナル学会の重鎮ティム・マククリーン氏と話す折りを得たが、彼も「日本にはトランスパーソナルの要素がたくさんある」と語り、とくに「有り難い」という考え方と「お蔭様」の立場を評価されていたのであった。

トランスパーソナルは、二十世紀の後半にアメリカ西海岸の「対抗文化」のなかで、西欧文明の限界への自覚から、東洋に憧れ、非西洋の発想から心の探求を学び直そうとの試みであった。ほとんどの場合に人類の進歩の最前線を自任してきた近代西洋人たちなのだから、こうした反省の大きな意義は疑いなく、だからこそそれなりの影響を与えてきた。心理学の歴史では、研究の方法や範囲を大幅に変えようとする動きが繰り返し、波のごとく襲っている。そもそもヴント、プレントナーらによる近代心理学の誕生が大きな事件だし、その後はフロイトに始まる精神分析運動、ワトソンの行動主義、マイヤーズ、ホジソンらによるスピリチュアリズム、ブラヴァツキーらの神智学など、それぞれに個性と特徴豊かな動きが、全体としての心理学を歩ませてきた。

\* 〒670-8524 兵庫県姫路市上大野7-2-1  
zitukawa@gm.himeji-du.ac.jp

しかし波とは、来ては過ぎ去るものである。ことにわが国に届いたトランスパーソナルの波は、そうならざるを得まい。日本は紛れもなく東洋の島国で、すでにそれ自から、カリフォルニアの彼らの憧れの多く詰まったところなのだ。その宝を私たち研究者は、大切にしているのだろうか。このことを問い直すべき時節に来ている。

解き明かしたい謎、追いかけてははられない問いが有れば、研究を進めるにつれ、既存の学問のタコ壺からは、はみ出しがちになる。もしかするとケン・ウィルバーも、そのようにしてトランスパーソナルを去ったのかもしれない。日本の学問研究は、ほぼすべて西欧の分類に従った枠組みに収まる。このため、本家本元の紹介を何よりの大事に置き、先に進んでもちょっとした色付けに終わることが多い。トランスパーソナルなら、むしろわが日本こそが本家本元とも言えるのだから、腹を括った振る舞いがしやすいに違いないし、すべきである。

## 2 ハイデガに見る西洋近代の世界

トランスパーソナルでは、ウィルバー初期の立場への反省から、「プレ」と「トランス」を区別する。「まだ」及ばないと「超えて」通り過ぎたのを混同してはならないというのだ。このとき、及んだり通り過ぎたりするところが「パーソナル」の地点である。「パーソナル」とは個人としての成り立ちで、そこを超えから「トランス・パーソナル」となる。

トランスパーソナルは、個人のまとまりと自覚を足場にする。すなわち、西欧近代の築いてきた「自立した主体的個人」を土台に組み込むのである。しかしながらこれだと、個人を超えたところから出で立ち、「個人というこだわり」そのものの成り立ちを問い直す仕事は、できない。トランスパーソナルは、西欧近代を超えて

進もうとしたはずなのに、まだそこに足を取られているのではないか。

そこで、西欧近代のもたらした景色を、ハイデガというドイツ人哲学者を足場に振り返ってみたい。近代哲学に「存在論」を取り戻そうと努めた人で、ナチスに進んで力ぞえしたとして評判を落としたものの、いまでも「二十世紀最大の哲学者」などとほめる人がいる。しかし、彼の考えは近代の個人主義そのもので、さらに言えば、人間の身勝手の極みとなっている。「反面教師」として、乗り越えるべきところを分かりやすく説いてくれているとも言えよう。

ハイデガによれば——人間は、人間以外のものをすべて道具にする。近代において神聖なものは姿を隠したので、森羅万象は「世俗の世界」に他ならない。この「世俗の世界」は、どういうわけか、人間にとって「お手ごろ」「おあつらえ向き」にできている。しかもなんと、この「お手ごろ」と「おあつらえ向き」こそ、ものごとのそもそもの有りようなのだという。これを小難しく言い回すと「存在の意味」となるが、人間とは万物の「存在の意味」を照らし出す「明るみ」だと説くのである。

つまりは宇宙全体が、人間にとっての「お手ごろ／おあつらえ」つながりで回っている。例えば、金槌は釘を打つため、釘は板を止めるため、板は家を造るため……といった具合にできている。それが世のものごとの「存在の意味」で、森羅万象は人間が使ってはじめて、なぜ有るのか明らかになる。「すべては資源として利用するためにある」と言った方が分かりやすいだろうか。

すべてが資源となり、利用されるのを待っている。しかし人間だけは違い、自らがもう明らか、つまり「他のものを通さず、それ自らが明るみである」。近代の自立した個人は明晰な意識を備え、だからこそ他を照らせる。しかも、人間が使って「存在の意味」を照らし出してや

れば、森羅万象のためにもなるというのだから、人間の都合こそこの世の光——とまあ、こんな図々しい話が『存在と時間』という本に書いてある。

ハイデガは西欧近代世界の枢要部に身を置いていた。その仕組みに気付きつつ、だが超えようとはせずに、居直ったのである。自由な個人が勝手に振る舞えばすべてうまく行くととは、近代の自由主義経済、資本主義の原理にも通ずる。しかし元をたどれば、人間が便利に使えるよう神様が万物を造って下さったとの、キリスト教の教えに連なっている。彼が「大哲学者」との評判を得られたのは、体制への巧みなすり寄りによるのである。私たちの心理学を、このような礎には築けない。

### 3 『おおきな木』の下のハイデガと道元

日本の〈うぶすな〉、つまり私たちの長く伝えてきた暮らしの流れは、こうではない。むしろ、ハイデガとは逆さまの立場である。「自分からものごとを明らかにしようと図れば、迷いだ。万象が己れを訪れ、明らかにしてくれるから悟りとなる」——こう道元が述べたのは、七百年も前だった。万物に照らされてこそ自己は明らかとなり、人間が照らそうとすれば煩惱だ——道元はハイデガを、産まれるはるか前に切り捨てていたのである。

この二人の真逆さまの考え方を、アメリカと日本の二つの童話が、わかりやすく描いている。まず、アメリカの作家シェル・シルヴァスタインの童話の絵本『おおきな木』だが、世界中で翻訳された少年と一本の木のベストセラー物語である。

子どもは木に登って遊び、木も幸せだった。大人になった少年は、遠くに行ってしまう。ただ、ときどき帰ってきては、あれこれ求める。木は、少年の求めすべてに応えた。金儲けのた

め実を売らせ、家を建てるため枝を払わせ、船を造るとなれば、ついに幹を切り倒させた。やがて老いて戻った少年が、疲れたと言う。木は、もう何もあげるものはないが、と残った切り株に座らせた。木は幸せだった——ことになっている。

シルヴァスタインは、黒人である。この本の出た一九六四年はアメリカで「公民権法」が成立し、法律上では人種差別の終わった年であった。のちに暗殺されるキング牧師が、ノーベル平和賞を受賞した年でもある。大きな木は、わがままな白い文明人に仕えた、心やさしい黒人奴隷を表わしているのだろう。木の幹は黒くないが、小さく密集した葉が黒人の縮れ毛を思わせる。少年はこの葉で作った冠をかぶり、「森の王様」となって遊んでいたのだった。

大きな木は、英語の原文では女性代名詞(she)で呼ばれる。西洋では、自然全体が「女なるもの」だから、この大きな木は白人の男以外の森羅万象でもある。白人の男が利用し尽くせば、みんな——道具も、動物も、山川草木も、有色人種も、そして女も——「幸せ」に決まっている。「有り難い」とも「お蔭様」とも感じず、幸せの押し売りさえする。発達の序列を定め上から見下せば、そうなるしかないのである。

シルヴァスタインはこうした思想と実情に、精いっぱい怒りを込め、皮肉な童話を記したのだった。この少年に、名前はない。が、「ハイデガ」と付けても悪くなくろう。きっと彼も少年時代、少しは可愛かったろうから。シルヴァスタインの大きな木は、「ハイデガの木」なのである。

それから十年ほどたち、日本で佐野洋子が『おぼえていろよ おおきな木』を出版した。あきらかに『おおきな木』のもじりである。ただ、中身はかなり違う。ある家の前に、大きな木が立っていた。家には、この木になにかと不満をぶつけて怒る男が一人住んでいた。木の葉

が落ちた、鳥のフンが落ちた、雪が落ちた、毛虫が落ちたなど、事あるごとに腹を立て、叩き、け飛ばして憂さを晴らしていた。ついにある日、腹立ちまぎれにその木を切り倒す。けれども、切り倒してみると、じつはその木が自分の淋しさ、悲しさ、恐れなどを、すべて受け止めてくれていたのだと気付く。

佐野の本の大きな木は、ただ差し出し、利用されるだけでない。人間の前に、対等以上に立ちただかっている。意識・自覚をむき出しにして怒る男の振る舞いは、木の「存在の意味」を明らかになどしない。むしろ木の本当の有り様を、優しさ、懐の深さ、有り難さを、隠していたのだ。ところが、ついに切ってしまったとき、すなわち意識による決断や振る舞いがもはや不可能となったとき、やっと木の意味は明らかとなった。同時に男が、自分のことも教えられたのである。

こちらは「道元の木」になっている。切ってしまった木に照らされ、人間以外のものによって、人間ははじめて己れを知ったのだ。しかも、木の「存在」が教えたのではない。「存在」が消えたとき、その木の「無」に教えられた話なのである。人間がけっして「自立」などしていないし、できないのもよく分かる。

シルヴェスタインの『おおきな木』は、木を使い尽くし、幸せが戻り、丸く収まったかのように結ばれる。しかし、その「幸せ」がウソだとは、だれが読んでも分かるに違いない。読み手の心に、やり切れない悲しみと怒りが静かに湧いてくる——こういう巧みな造りの本なのだ。ちょっと技巧がこり過ぎではないか、とも思えるが、こんな曲芸でないと訴えられないほどに、西洋近代の心は病んでいるのである。

#### 4 外すべき近代の三つの「しがらみ」

西欧近代は病んでいる。トランスパーソナル

はそれを乗り越えようとしたが、まだまだ歩み足りない。翻って、現代の日本を縛り、わが国にふさわしい学問の成り立ちを妨げている考え方、謂わば思想の「しがらみ」が三つある。それらを私は、〈一つ掲げ〉〈心の囲い込み〉〈意識革命〉と名付けている。

〈一つ掲げ〉とは、読んで字のごとく、「一つを高く掲げる」思想のことである。圧倒的に強いもの、優れたものを高く掲げ、その立派な「一つ」を万物に君臨させる。さらに、すべてをそこから序列づける仕組みも出来てくる。なんでも一番がよい。敗者は負け惜しみを言わず従え——「勝てば官軍」の身構えで、よいものを一カ所に集め、独り占めをよしとするのである。金儲けが第一で、貧困を「自己責任」と見て突き放す新自由主義や、ノーベル賞や金メダルばかりもてはやす競争至上主義がここから産まれてきた。何かを成し遂げても、周りの様ざまからの〈お蔭様〉を思えない立場である。

ハイデガの思想には、〈一つ掲げ〉がはっきり認められる。人間は「明るみ」となって輝き、他の万物に君臨する。そこには利用する者とされる者という、支配の思想、上限関係・序列の思想がはっきり現われる。ただしその地位は、はるか彼方の未来から、死を越えて呼びかけてくる「存在」の与える地位なのである。その「存在」そのものこそが「一つ」で、「在りて在るもの」を神の別名としてきた、キリスト教神学の流れを汲む思想となっている。

外すべき「しがらみ」の二つ目は、〈心の囲い込み〉である。心とは、どこにあるのだろうか？——今の科学では、脳の中とされる。ことに、大きく複雑に発達した人間の脳の内に、心のありかを定めているのだが、それこそ〈心の囲い込み〉の実現の行き着いた姿に他ならない。しかしこの説に、しっかりした科学の根拠はない。

西洋には、人間様だけが偉いという人間中心

主義が根強い。心があるのは人間だけと考えれば、人間以外の相手に何をしても心は痛まない、人間の都合で「資源」として利用でき、快適に暮らせるかもしれない。『大きな木』の主人公の世界は、まさにこれであった。しかし、脳に閉じこめたままでは、心は外の世界とつながりようがない。

近代西洋人でさえ、きちんと考える人はとくにこれに気づいていた。例えばフランスの哲学者ベルクソンは、脳は電話の交換機のようなものだと言った。これは〈心の囲い込み〉への論理的な批判である。百年ほど前、手動の交換機を備えたパリの電話交換局は、パリジェンヌ憧れの職場であった。交換機が無ければ通話はできないけれど、電話を掛けてくる人びとが通話の主演なのは疑いようがない。通話は交換機の外から来て、外に出てゆく。脳も同じことで、むしろ、宇宙全体を行きかう心の中継地に過ぎないという。交換機をインターネットのサーバー・コンピュータに置き換えてみれば、この批判が今でも色あせていないと知れるであろう。

〈心の囲い込み〉は、心の働きの一部にしか当たらない脳で、心の全体を呑み込もうとしている。世界も心も、様ざまな〈お互い様〉で成り立っていると気付くべきである。

三つ目の「しがらみ」は〈意識革命〉となる。近ごろ事故などの報道では、当事者に「意識」があるかないかを、よく付け加える。昔なら「息が」だったのに、「意識」が取って代わったのである。また「意識」の有り様が、犯罪や不正行為の処罰を左右する。こうした事情は、近代心理学の成立の頃から、意識でなんでも解決できるとの思想が急に広まったことに由来する。これが〈意識革命〉で、十九世紀半ばに「意識」が革命を起こし、世界を乗取ったとも言うべき思想史の大転換であった。

意識こそ人間の根源で、全宇宙の秩序をさえ

支えるとの思想なのである。ハイデガの「明るみ」は、この〈意識革命〉の性格をよく現わしている。十七世紀半ばの「我思う、ゆえに我あり」というデカルトの言葉はこの先駆けだが、発表当時は激しい論争があり、どうみてもデカルトが劣勢だった。ところが二三百年かけて、世界のほうが説得されたのである。

では、「意識」とは何だろうか？——じつは、これがよく分からない。私たちは日ごろ、見聞きし、感じ、考え、思い出したりしている。「意識」が働いていることは、だれも疑うまい。ところが、「何がどこまでどう意識にあるか」となると、はっきり答えられる人はだれもいない。明らかなようできて、じつはこの上ない謎なのだ。この有り様を「明らかな謎」と言い回しておきたい。分かった振りをせず、〈おのづから〉知らされ、教えられることを尊びたい。

「明らかな謎」に包まれつつも、〈意識革命〉は「意識」こそ確実で、すべての科学技術・学問を支えると言い張った。初期の心理学を支えた実証主義も、ここから誕生したのであった。さすがに現代ではここまで言わないが、この「革命政権」は少し形を変えながら、今なお続いている。この怪しげなものを拡張し「意識のスペクトル」を作っても、うまく働くはずがない、と私は思う。

## 5 〈やまとごころ〉の立場と〈うぶすな〉

明治維新は、大砲で脅され開国させられた江戸幕府のうろたえに乗じた革命だった。担い手たちは、自分らもペリーの大砲を手に入れようと企てたのであった。そこで藩閥政府による、西洋式の「文明開化」の無理じいが始まった。古くからの思想は「封建的」と札貼りされ、風紀を乱す「迷信」として取り締まりを受ける。この時代に新しく始まったことの多くを、近ごろの「保守」は「伝統だ」と言い張るのであ

る。

しかし私はむしろ、「迷信」のうちにこそ、むしろ祖先の伝えてきた知恵が詰まっているのではないかと考える。もう時代は変わったのだからと、「プレ」に戻るのを危ぶむ人もいよう。しかし、一直線の進歩・進化が、心・魂の事柄に必ずしも当てはまると限らるまい。暮らしに根付く本性はそうたやすくは変わらず、私たちの心構えを支えているのではないか。

別の言葉で言うと〈うぶすな〉である。漢字で「産土」と書けば、産まれた土地の意味となる。なるほど私たちは土に支えられ、生かされている。ただ、私たちの命がお蔭をこうむっているのは、土に限らない。古事記などにある豊玉毘売トヨヒメは海の神の娘で、火遠理命ホオリノミコト(山彦彦)の妻となったが、お産に臨んで海のそばに産屋を建て、中でワニ(鮫)の姿となって子どもを産んだのだった。

土は、水とつながっている。私たちもまた、土だけでなく、海、空、水をはじめ動植物、他の人びとなど、あらゆるもの、森羅万象により〈お蔭様〉で生かされている。死んだあとも「土に帰る」とは限らず、水葬も風葬もある。私たちをとりまき、産み育ててくれたもの、そして帰ってゆくところ、それらのすべてが〈うぶすな〉なのだ。ここに立ち返る構えで、トランスパーソナルを進められないだろうか。

私たち人間が森羅万象の〈お蔭様〉をいただくなら、それら万物もまた、心のやり取りを含め、〈お互い様〉で支え合っているに違いない。そうした通いあいのうちから〈おのづから〉教えを受ける立場をとるなら、信心・祀りの営みにおいても、これまでのトランスパーソナルに見られるような精神主義に留まらず、「物質」を含めた現世利益も考えてよいはずである。

〈うぶすな〉に立ち返るには、言葉も大切である。近ごろでは、英語を公用語にする企業がある。さらには英語で授業をする大学が増え、

高校にまで及んでいるらしい。私たちは日本語で育ち、日本語を使って暮らす。決まった言い回しが多い科学論文や商取引きの文書なら、外国語でも不自由なからう。だが、気持ちや考え、身構え・心がけなら、身と心に添った言葉でないとい空回りする。いくら勉強しても、外国語でじっくり来るはずはない。

日本語のうちでも、ひとときわ日本語らしい日本語とそうでないものがある。例えば「思想」は漢語だが、これを「やまとことば」にすると「心構え」「心がけ」などとなる。目、手、足、水、火、石、走る、鳴く、うまい、怪しいなどの身の回りの物事、それに「てにをは」など日本語の芯をなす言葉は分かりやすいが、語源の不明なものが多い。それらが「やまとことば」である。漢字と中国語が入る前から日本列島で使われていた言葉、またその後、この古い言葉をもとに育ってきた言葉である。

文字を使う前にあった言葉だから、音・声により成り立っている。耳で聞き、口で話す——世界中のどの自然言語も、はじめは皆そうであった。文字を介すれば洗練されるけれど、力は鈍る。「やまとことば」はふしぎに、外国語との共通語彙がたいへん少ない。伝わったり派生したのでない「湧いて出た言葉」だと言える。だからこそ「やまとことば」は、心と体に響くのである。これを使わない手はない。

古事記、万葉集や源氏物語などを作り上げているのも「やまとことば」である。記録こそないけれど、縄文時代から続いてきたと推定できる。昔話も、この言葉で言い伝えられてきた。だから意識の上面に留まらず、心の深いところにも寄り添うのである。あまりに日本的な言葉は、外国との交流を妨げると言う人もいるが、そんなことはない。上田敏は訳詩集『海潮音』で「やまとことば」のみを用い、フランス、ドイツ、イギリス、イタリアの近代詩を翻訳して見せたのだった。

「やまとことば」は論理性に乏しく学問的な議論に向かないと言う人もいるが、これも間違っている。「やまとことば」には私たちの祖先の心組みが織り込んであるのだから、それなりの筋道の流れがしっかり備わる。これに沿って学問を築いてこそ日本独自の、世界に誇れる研究が産まれるはずなのだ。世界遺産の富士山や姫路城と同じことで、余所に無いから貴重な

のである。それでこそまことの国際化であろう。

先の三つの歪んだ思想〈一つ掲げ〉〈心の囲い込み〉〈意識革命〉を正すため、「やまとことば」で仕度すれば、〈お蔭様〉〈お互い様〉〈おのづから〉という〈やまところ〉が見つかる。私たち日本人がトランスパーソナルに留まらず、さらに越えて進めば、これら古い慣らわしの懐に「ワープ」するに違いないのである。